

『壊憲か活憲か』出版記念討論会

2016.9.3@明治大学リパティタワー

自民党は改憲政党だったのか

明治大学政治経済学部・西川伸一
 nisikawa1116★gmail.com (★→@)
<http://www.nishikawashin-ichi.net/>

1 問題の所在

安倍晋三首相の2016年3月2日の参院予算委員会での発言：

「自民党の立党当初から党是として憲法改正を掲げている。私は自民党総裁であり、先の選挙でも訴えているのだからそれを目指していきたい」（2016年3月3日付『朝日新聞』）



憲法改正は自民党の立党当初からの党是だったのか。



自民党の「正史」や綱領的文書から検証する。

1

『壊憲か活憲か』出版記念討論会

2016.9.3@明治大学リパティタワー

2 立党時の採択文書

① 立党宣言

② 綱領

③ 党の性格

④ 党の使命

「第六、現行憲法の自主的改正を始めとする独立体制の整備を強力に実行し」

⑤ 党の政綱

「六、独立体制の整備
 (略) 現行憲法の自主的改正をはかり」



1955年11月15日 @ 中央大学講堂

2

『壊憲か活憲か』出版記念討論会

2016.9.3@明治大学リバティタワー

3 自民党の「正史」刊行物

	書名	刊行年	総裁	幹事長
1	自民党史	1961	池田勇人	前尾繁三郎
2	自由民主党十年の歩み	1966	佐藤栄作	田中角栄
3	自由民主党二十年の歩み	1975	三木武夫	中曽根康弘
4	自由民主党党史	1987	中曽根康弘	竹下登
5	自由民主党五十年史	2006	安倍晋三	中川秀直

(1) 『自由民主党五十年史』における記述

■ 54 第1部 自立を目指して

3 憲法改正を党是に

★タイトルとして大書



3

『壊憲か活憲か』出版記念討論会

2016.9.3@明治大学リバティタワー

■ 六大政綱

自由民主党の基本政策の骨格を明示した「政綱」には、①国民道義の確立と教育の改革、②政官界の刷新、③経済自立の達成、④福祉社会の建設、⑤平和外交の積極的展開、⑥独立体制の整備——の6項目が掲げられた。自民党が結党以来の50年間、ほぼ一貫して政権を維持し続けた

『五十年史 [上巻]』 59頁。

し、日本の平和と安全を確保してきた。第6の「独立体制の整備」では、「平和主義、民主主義及び基本的人権尊重の原則を堅持しつつ、現行憲法の自主的改正をはかり、また占領諸法制を再検討し、国情に即してこれが改廃を行う」ことが明確に打ち出された。憲法の自主的改正は結党時の「一般政策」および「緊急政策」にも明記された。憲法改正こそ自民党の党是であり、結党の原点である。 『同』 60頁。

「一般政策」
→ 6番目
「緊急政策」
→ 8番目
★いずれも
最後

4

『壊憲か活憲か』出版記念討論会

2016.9.3@明治大学リパティタワー

(2) 他の4つの党史における記述

① 『自由民主党党史』 (1987)

「党史編」「証言・写真編」「資料編」のうち「党史編」には「政綱」が記載されず。

② 『自由民主党二十年の歩み』 (1975)

「立党のときの政綱や使命、性格がその後も一貫して自由民主党の政策の基調となっている」(140頁)

③ 『自由民主党十年の歩み』 (1966)

「〔政綱は〕政策の基本方針を示す」(105頁)

④ 『自民党史』 (1961)

政綱本文とほとんど変わらない「説明」があるのみ(65頁)。

★憲法改正を「党是」と規定したのは『五十年史』だけ。＝「安倍史観」

『壊憲か活憲か』出版記念討論会

2016.9.3@明治大学リパティタワー

4 綱領的文書にはどう書かれてきたか

『自由新報』1985.1.15/22合併号

(1) 立党時の綱領 (1955)

憲法改正についての記述なし。

(2) 「50年綱領」(案) (1975)

1974.11党綱領委員会(石田博英会長)が新綱領草案をまとめる。

→憲法改正は討議対象から除外

1975.1党大会で採択の予定が、党内タカ派の反発で提出を見送る。

(3) 「新政策綱領」(1985)

田中秀征の「60年綱領」制定を求める『自由新報』への投稿がきっかけ。

しんぱう論壇



たなかしゅうせい
田中秀征氏(43)
長野1区 当1
東大文卒。大蔵委員、
全国商工会中央講師、
福山大学講師。石田
博英元首相の政策担
当秘書を長らくつと
めた。58年暮れの総
選挙で初当選。

「60年綱領」制定しよう

— 結党30周年事業への提言

『壊憲か活憲か』出版記念討論会

2016.9.3@明治大学リバティタワー

1985.10.2 党政綱等改正委員会の井出一太郎委員長が「政策綱領」の原案をまとめる。

→憲法については「絶えず見直す努力をする」

★中曽根康弘首相「よく出来ているのではないか」

「私は「憲法は日程にのぼらせない」といって、右の方に、ある程度、ラインの限界を示していた」(中曽根 1996 : 357)

その後、タカ派が「現行憲法の自主的改正」の削除に猛反発。

→「憲法の自主的改正〔は〕立党以来の党是」だとして「現行憲法の改正につき検討を進める」で決着。

1985.11.12 両院議員総会

白川勝彦衆院議員「改憲が「党是」というが、30年前の綱領の5本柱にも入っておらず、やっと「党の使命」の7項目目に書いてある」(1985年11月13日付『朝日新聞』)。(ママ) 7

『壊憲か活憲か』出版記念討論会

2016.9.3@明治大学リバティタワー

(4) 「新宣言」(1995)

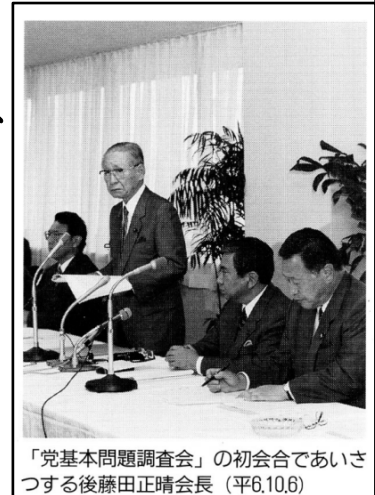
1994.10 党基本問題調査会(後藤田正晴会長)が、党の基本方針の見直しに着手。

1994.12.16 河野洋平総裁に「新宣言」を答申：
「時代の変化に適応するため、国民と共に幅広く論議を進めていきたい」

→「現行憲法の自主的改正」を記載せず。
後藤田「僕は、みんなが絶対反対しそうな字句を潜り込ませたんだ。そうしたら、みんなの関心がそこに集中して他の部分には行かなかった」(後藤田 1998 : 289)

1995.3.5 党大会「二十一世紀に向けた新しい時代にふさわしい憲法のあり方について、国民と共に議論を進めていきます」で決定。

→改憲派は改憲方針を残せたと考えた。



『壊憲か活憲か』出版記念討論会

2016.9.3@明治大学リパティタワー

(5) 「新綱領」(2005)

2004.9新理念・綱領に関する委員会（委員長・安倍→武部勤）

→ 2005.3に安倍幹事長代理から小泉純一郎総裁に成案報告

2005.10.28 新憲法草案発表

象徴天皇制維持・「自衛軍を保持」明記・改憲発議要件の緩和

→ 天皇元首化には「復古調だと誤解される」などの慎重論

2005.11.22立党50年記念党大会で「新綱領」発表

第1項 私たちは近い将来、自立した国民意識のもとで新しい憲法が制定されるよう、国民合意の形成に努めます。

『五十年史 [下巻]』481頁：「「新綱領」には、これまでの綱領には盛り込まれていない「憲法」について新たな1項を起し、これを冒頭に配置することにより、新しい憲法制定にかける自民党の決意を強く打ち出した」。

9

『壊憲か活憲か』出版記念討論会

2016.9.3@明治大学リパティタワー

(6) 「平成22年(2010)綱領」(2010)

野党時代の2010年1月24日の第77回党大会で決定。

2016年7月18日号

現状認識(1316字)

1. 我が党は常に進歩を目指す保守政党である (1)~(3)
2. 我が党の政策の基本的考えは次による (1)~(6)
 - (1) 日本らしい日本の姿を示し、世界に貢献できる新憲法の制定を目指す
3. 我が党は誇りと活力ある日本像を目指す (1)~(6)

2012.4.27 日本国憲法改正草案決定

天皇元首化・「国防軍を保持」・緊急事態条項の新設



★4日→発売売切れ続出

『壊憲か活憲か』出版記念討論会

2016.9.3@明治大学リバティタワー

5 自民党首相は国会でどう発言してきたか**(1) 鳩山一郎の改憲演説 (1955.12.2所信表明演説)**

「保守党による絶対多数党内閣の仕事として（略）その第一は、憲法の改正であります」 ★1956参院選で「2/3」が遠のく

→それ以降の首相の国会発言で憲法改正への言及は皆無。

(2) 田中角栄の護憲答弁 (1972.11.10参院予算委)

「法律条文というものは時の流れで変わってはありますが、憲法の条章というものはこれはもう不変のものである」

(3) 中曽根の日本国憲法評価演説(1983.1.24施政方針演説)

「戦後日本の繁栄は、自由と平和、民主主義と基本的人権の尊重を高らかにうたった現行憲法、（略）サンフランシスコ平和条約と日米安全保障体制の上に花開いたのであります」

11

『壊憲か活憲か』出版記念討論会

2016.9.3@明治大学リバティタワー

(4) 小泉「議論を深める」(2004.1.19施政方針演説)

「新しい時代の憲法のあり方について、大いに議論を深める時期であると考えます」

(5) 安倍「憲法改正に向けた国民的議論を」(2013.2.28施政方針演説)

★鳩山一郎以来

2013.10.15所信、2014.1.24施政、2015.2.12施政、2016.1.22施政でも繰り返す。

6 結論

① 憲法改正は立党以来の「党是」というのは事実誤認。

② 「安倍史観」で党史を「修正」→改憲主張の党史的正当性を調達。

③ かつては護憲派も意気軒昂だった。

「正史」以外の引用・参照文献

後藤田正晴 (1998) 『情と理 [下]』講談社。

中北浩爾 (2014) 『自民党政治の変容』NHKブックス。

中曽根康弘 (1996) 『天地有情』文藝春秋。

12